

柔道整復科教員 木全 健太郎

柔道整復や鍼・灸・あん摩マッサージ指圧の業務を行うためには、身体の構造や機能を深く理解することが必要です。また、顔や性格に個人差がみられるように、身体の構造にも特徴があり、必ずしも教科書通りではありません。本校教員は専門科目の教育内容を充実させるため、そして臨床への応用力を養うことを目的に、愛知医科大学医学部解剖セミナーに参加し、研究・教材開発に取り組んでいます。その活動の一環として、2009年11月に大阪で開催されました第18回日本柔道整復接骨医学会学術大会で研究発表を行いましたので紹介します。

「後骨間神経麻痺による手関節部痛に関する考察 第2報」

木全健太郎^{1) 2)}、高橋亮^{1) 2) 3)}、愛知秀一^{1) 2) 4)}、國田佳子²⁾、中野隆²⁾

1) 中和医療専門学校柔道整復科、2) 愛知医科大学医学部解剖学講座、3) 岐阜大学医学部解剖学、4) 太極堂接骨院、

橈骨神経の枝である後骨間神経の障害では、支配筋である手指伸筋群の麻痺によって‘下垂指’を呈することが知られている。また、解剖学の教科書では後骨間神経を‘主として運動性線維からなる’としていることが多い。従ってこの神経の障害では疼痛や知覚障害はみられないと考えられている。ところが、‘下垂指’に加えて手関節部の痛みを伴う症例に遭遇したので、後骨間神経の手関節部への分布の様子を肉眼解剖学のおよび組織学的に観察した。

対象は愛知医科大学解剖セミナーにおいて教育・研究用に供された解剖実習体3体6側を用いた。

後骨間神経は回外筋を貫いた後、前腕骨間膜の後方を手指伸筋群に枝を出しながら下行し手関節背側にまで達する様子が全例で確認された。また手関節背側において後骨間神経の終末部を周辺の結合組織とともに摘出し顕微鏡で観察したところ、全例で後骨間神経の終末部と思われる神経線維が結合組織内に分布する様子が確認された。

このことから後骨間神経は手関節部の知覚に関与し、手関節の円滑な運動を司るとともに、同部位の疼痛を惹起することが示唆された。我々が経験した症例は、後骨間神経に含まれる知覚性線維も障害されたため、下垂指に加えて手関節部痛を併発したものと考えられた。